

‘The Love Song of J. Alfred Prufrock’ における ‘Objective Correlative’ について

山 本 直 雄

The ‘Objective Correlative’ in ‘The Love Song of J. Alfred Prufrock’

Tadao Yamamoto

T. S. Eliot の詩に占める ‘objective correlative’ の意味は深い。この小論は彼の初期の傑作‘The Love Song of J. Alfred Prufrock’ における objective correlative 及びその諸相を観察するものである。

1.

‘Hamlet and his Problems’ の中でエリオットが用いた ‘objective correlative’ は当時の文壇に大きな波紋を投じた。彼は、この原理によって Shakespeare の傑作の一つと言われる *Hamlet* を批判したばかりでなく、当時のイギリス詩の主流 Georgian Poetry の流れを堰止めるぐらいのショックを与えた。Hugh Williamson, F. O. Matthiessen を始めとする多くの批評家や学者は、その問題性とエリオットの詩に占める objective correlative の重要性の故に賛否様々に論じてきた。

だが、‘objective correlative’ そのものの散文による説明は、エリオット自身の言葉に優るものはない。

The only way of expressing emotion in the form of art is by finding an “objective correlative”; in other words, a set of objects, a situation, a chain of events which shall be the formula of that particular emotion; such that when the external facts, which must terminate in sensory experience, are given, the emotion is immediately evoked. ⁽¹⁾

芸術の形式で情緒を表現するには、「客観的相関物」を見出す以外にない。言い換えると、その特有の情緒を示す公式となるべき一連の対象物、あるいはある情況、あるいは一連の出来事が必要なので、それはそういった事実が与えられると同時に、我々の胸にその情緒を喚起する力を持った事物でなければならない。

この詩論は ‘Tradition and the Individual Talent’ で彼が主張した、「詩人は詩的創作においては解媒の働きをすべきであって、その個人的情緒を詩に流してはならない」といういわゆる impersonal theory と彼のフランスサンボリストの詩への傾倒の落とし子である。個性を直接詩に導入しないようにするのは、個人的情緒や体験を描写するのではなく、外的世界の対象物 (emotional equivalent) と置き換えるかもしくは、それらを様々に組み合わせる一種のアマルガムを構成して変形しなければならない。そして作られた詩においては、すべての人物、情況、出来事のイメージはチェーンのように結がれ詩人自身の情緒とは異った詩特有の情緒がかもし出されていなければならない。これらの過程で失敗すれば、詩人はその個性を露呈してしまうのである。エリオットが *Hamlet* の Hamlet がある意味で Shakespeare 自身を思わせる所があると言われるのも頷けると言っている ⁽²⁾ のはそのためである。

彼の詩は正にこの宣言を忠実に物語っている。「人間味がない」「冷酷無比だ」といった非難や、柔らかな調べだと思って従って行くと突然ぎくしゃくした不協和音になったり話が突然中断され、一見まるで関係のないような話題へ移行してしまうといった表面上の断片的傾向も、実は objective correlative として、いわゆる logic of imagination で結がれているのである。エリオットの詩は、その意味で、注意深く一語一語かみしめ行間も意識しながら読まなければ意味がない。

2.

私は、‘objective correlative’ の観点に立って、エリオットの ‘The Love Song of J. Alfred Prufrock’

を観察しその諸相を提示してみたい。

この詩のテーマは、そのまま 'The Waste Land' に至るまでの彼の詩のテーマと言っても過言ではない。それ故そに原型とも言える pattern が見い出される。

erotic な愛に魅力を感じているが恋愛不能の男、社会に対する否定的な考え方, irony, 突然の結合, 突然の変調, 借用, beginning と action はあるが行き着く所がなく必ず beginning に戻る点などその後の彼の詩を貫通する要素は殆どある。

詩の表現する particular emotion を仮に '多分に erotic な要素をもつ恋愛に憧れを抱いているが、単調で退屈な生活に甘んじているため自信がなく実行に移せない気持' としておく。

Dante の *Inferno* から借りたエピソードは、精神的に地獄にいる主人公が恥を忍んで告白する心境を表わしている。

Let us go then, you and I,
When the evening is spread out against the
sky
Like a patient etherised upon a table.

詩の世界に誘い込む書き出しと共に、主人公の気持を表現する。'夕暮れ' と '手術台で麻酔をかけられ大の字になっている患者' の analogy は詩全体から見れば必然的なのだが、普通の人間の思考範囲を超えている故にショックを与える。エリオットは、このようないわゆる予期せざる結合 (conceit) をしばしば行うが、それは彼の17世紀 Donne, Marvell を中心とする

Metaphysical Poetry への傾倒から生まれた。思想をバラの匂いのように臭ぎ、スピノザとタイプライターの音が精神において同一空間に収まっている詩人が現実にはないような情緒を作ろうとする時、このスタイルが生ずる。さてできることならエーテルでもかけてもらいたいが、行きましょう。

In the room the women come and go
Talking of Michelangelo.

行こうとする主人公の頭によぎるサロンの女たち。脚韻の 'go' と 'Michelangelo' の響きにこの女たちの姿が浮き彫りにされる。こうした月とスッポン式 contrast は、anti-climax 的 irony をかもし出す。'The Love Song of J. Alfred Prufrock' というタイトル自体、ふざけたタイトルと次の *Inferno* からの荘重な響きを持つエピソードの対照から始まるこの流れは particular emotion に符調を合わせて詩全体を貫いている。しかし、Giotto や Raffaello でなく Michelangelo の話をする必然性は、ここではわからない。それは後に出てくる '〔They will say: 'How his (Prufrock's) hair

is growing thin』' の一句によって明らかになる。つまり、Michelangelo はいわば遅い男のシンボルである。それに比べて毛の薄い俺は情けない。女たちは男らしい精力溢れる男の話をしているに違いない。エリオットの詩句は、それ自体では大した意味はなく、本当の意味は相対的に生ずるのである。

The yellow fog that rubs its back upon the
window-panes,
The yellow smoke that rubs its muzzle on
the window-panes,
Licked its tongue in to the corners of the
evening,
Lingered upon the pools that stand in
drains,
Let fall upon its back the soot that falls
from chimneys,
Slipped by the terrace, made a sudden leap,
And seeing that it was a soft October
night,
Curled once about the house, and fell asleep.

霧を猫に見立て町の姿を表現したこの一節は含蓄豊かである。'fog' はロンドン名物であるが、地獄の雰囲気でもある。'yellow' 'muzzle' は不吉な予感を示し、猫のイメージはものぐさで 'Insidious' である。そして全体で、この詩の結末を予言しているのだ。すなわち、地獄に喘ぐ主人公が一応試みようとするが結局尻込みして、元の木阿弥になるのだと。

And indeed there will be time
To wonder, 'Do I dare?' and, 'Do I dare?'
Time to turn back and descend the stair,
With a baldspot in the middle of my
hair—

〔They will say: 'How his hair is growing
thin』

My morning coat, my collar mounting
firmly to the chin,
My necktie rich and modest, but asserted
by a simple pin—

さて次の連から主人公の阿呆らしいぐらいい長い弧疑遼巡 (streets that follow like a tedious argument) が始まる。これはその二連目で、主人公の現在の境位が暴露される下りである。'time to wonder, 'Do I dare?' と 'Time to turn back and descend the stair' には現在の主人公の内面的ディレンマと共に、'Let us go then, you and I' と 'Like a patient etherised upon a table' の二本線が投影される。そしてこの主人公が頭の真中に禿があり、社会の枠に規定されて身動き出来ない中年の中流階級の男だと知らされる。しかしこれもまた objective correlative である。すなわち主人公は particular emotion のために仕立てられているのであって、詩人の心境が中年的なわけで

はないのである。勿論詩人自身と全く無関係なはずはないが、エリオットの詩的信念からすれば詩において重要なのは詩を書く主体ではなく詩的材料の構成の方法、結合の圧力、及び作られた詩自体なのである。主人公も詩的情緒をかもし出す材料なのだ。Hugh Kenner は Prufrock という名前はこの詩の及ぶ意識の範囲を象徴すると評した⁽³⁾が、的を得ていると思う。主人公の名前を暗示するのだろうが、title に示されるだけで、他人から呼ばれることは一度もない。仮に主人公の名前としても、存在するのはこの作品だけである。エリオットは Henry James のノエミは作品の中のみ存在し、現実にはいないと評したが、それはそっくりエリオットの詩の登場人物に適用できる。いうなれば作品が登場人物の姿を形造るのである。

For I have known them all already, known
them all
Have known the evenings, mornings
afternoons,
I have measured out my life with coffee
spoons;

迷うわけは来る日も来る日も同じようにただ機械的に生きていて自信がないからさ。ここには、内的情緒を外的事物を組み合わせて表現する端的な例が見い出される。

And I have known the arms already, known
them all
Arms that are braceleted and white and bare
(But in the lamplight, downed with light
brown hair !)
Is it perfume from a dress
That makes me so digress?
Arms that lie along a table, or wrap about
a shawl.
And should I then presume?
And how should I begin?

女の腕が真近に迫り、主人公はその産毛に唾を呑込む。さてどうしたものだろう。どうやって切り出そう。いよいよクライマックスは近づいた。この一節は erotic は恋愛を夢見る臆病な男の、それが手の届く範囲にある時の心境である。

Shall I say, I have gone at dusk through
narrow streets
And watched the smoke that rises from the
pipes
Of lonely men in shirt-sleeves, leaning out
of windows?...

結局切り出せなかった。主人公は、自分が年を食え

ば、‘窓から身を乗り出しながらタバコをくゆらす淋しい老人’すなわちパートナーなき老人の仲間になるのじゃないかと不安を抱く。これなど非常に現実的な光景なのだが、この context においては全く現実離れした情緒を醸み出している。この例のみならず、彼のあらゆる詩句はその context においてのみ詩的意義があるように構成されている。もうそうでなかったらその詩の pattern は特有でなくなるからである。

And the afternoon, the evening, sleeps so
peacefully!
Smoothed by long fingers,
Asleep... tired... or it malingers,

And I have seen the eternal Footman hold
my coat, and snicker,
And In short, I was afraid.

the desire to be etherised が勝利を収めたことを皮肉りながら、主人公は尽々自分の情なきを悟る。そして自分で自分をなじり、ついに本心を明かしてしまう。何もかも吐き出してしまえば、心理的に強くなり、今度は自分の行動の情なきを正当化しようとする。‘And would it have been worth it, after all,’で始まる次の二連で主人公はやっきになって自分を取り戻そうとする。

No! I am not Prince Hamlet, nor was meant
to be;
Am an attendant lord, one that will do
To swell a progress, start a scone or two,

そして突然の変調と共に居直り、迷ったのはハムレットも同じでも俺はせいぜいがとこ三枚目とたかをくくる。

I grow old...I grow old...
I shall wear the bottoms of my trousers
rolled.

Shall I part my hair behind?
Do I dare to eat a peach?
I shall wear white flannel trousers, and malk
upon a beach.
I have heard the mermaids singing each to
each.
I do not think that they will sing to me.

だが、このままではこの先不安でたまらない。禿が隠れるようなヘアスタイルをし、粋な格好でもしてみようか。だけど、それでも多分ダメだろう。‘I have heard the mermaids singing each to each.’ ‘I do not think that they will sing to me.’は明らかに Donne

の 'Song' の中の 'Teach me to heare mermaids singing.' を意識して作ったものである。その context では、積極的なニュアンスで用いられているが、ここでは逆に消極的である。エリオットの詩に借用、言及が多いのは、彼が詩作の際に詩的伝統を強く意識したために起こった現象である。しかし決して猿まねをしたりせず源とは異った context で用い、何らかの新しい情緒を形成しているのは過去のイメージとそれを現代的境位に設定した場合のイメージとの contrast から生ずる ironical なムードであると言っても過言ではない。

やがて人の声が出て、何の進展もないまま意識あれど無意識にならざるを得ない人混みに隠れてしまう。

(till human voices make us, and we drown.)

以上のような観察をまとめると次のようになる。'The Love Song of J. Alfred Prufrock' においてはあらゆる事物・人物・情況・出来事は心的状態を表わしている。そして、それらは、詩的テクニクである irony, conceit, 借用の助けを借りながら、球入れのかごに群る子供たちのように、詩的情緒 (particular emotion) に集まっている。逆に言えば、詩的情緒といういわば魔法のランプで詩を照らしてみると、でたらめのように見えた image の行列が objective correlative として神経のように結がっているのだ。

註

- (1) *The Sacred Wood* (London : Methuen & CO LTD, 1950) P.100
- (2) *Ibid.* P.101~102.
- (3) *The Invisible Poet : T. S. Eliot* (London : Methuen & CO LTD, 1965), P.6.

参 考 文 献

- (a) テキスト
Collected Poems, 1909—1962. London : Faber and Faber, 1963.
The Sacred Wood (1928 edition). London : Methuen & CO LTD, 1950.
- (b) 参 考 書
 Kenner, Hugh. *The Invisible Poet : T. S. Eliot.* London Methuen & CO LTD, 1965.
 Matthiessen, F. O. *The Achievement of T. S. Eliot.* New York : Oxford University Press, 1959.
 Patterson, Gertrude. *T. S. Eliot : Poems in the Making.* New York : Manchester University Press, 1971.
 Williamson, George. *A Reader's Guide to T. S. Eliot* New York : The Noonday Press, 1966.

西脇順三郎「T. S. Eliot」研究社, 1965.

深瀬基寛「エリオット」(筑摩叢書)

筑摩書房, 1968.